

【資料と解説】

エス・エ・ハイキン著『力学』をめぐる討論の資料 — その党中央宛書簡について —

アー・エス・イリュージン（市川 浩 訳）

訳者まえがき

2007年5月24日、モスクワ国立大学物理学部の固体物理学教室主任で、物理学部記念館の館長でもあるアー・エス・イリュージン（Александр Сергеевич Илюшин）教授のお部屋を訪問した折、同氏から物理学者セミョン・エマヌイロヴィチ・ハイキン（Семён Эмануилович Хайкин: 1901-1968）の著書『力学』をめぐる、たいへん名高い論争に関する資料を紹介された。論争の過程で、ハイキンが党中央に救済をもとめた書簡である。この書簡は、ロシア国立社会＝政治史文書館（Российский государственный архив социально-политической истории）に現物が保管されている（/Фонд 17, Опись 125, Дело 363./ лл.64-71）ほか、ハイキンがながく勤務したモスクワ国立大学物理学部の記念館文書庫に草稿と写しが所蔵されている（モスクワ国立大学所蔵の写しには日付がないが、ロシア国立社会＝政治史文書館所蔵のものには、1945年5月25日の日付がある）。

訳者は、拙著『冷戦と科学技術—旧ソ連邦 1945～1955年—』（ミネルヴァ書房、2007年）第2章「ソヴィエト物理学者の思考と行動」（99～153ページ）において、戦時における学術体制の歪みを背景として蓄積された、一部の物理学者の他の物理学者にたいする強い嫉妬や敵意こそ、冷戦初期の物理学界において闘わされた激しいイデオロギイ的論争の、ひとつの大きな要因であることを指摘しておいた。

このたび、訳者のこうした立場を知るイリュージン氏から、上記の資料と自身それについて新たに執筆した解説を日本の読者に向けて紹介するよう強く勧められた次第である。

いわゆる“大学系”物理学者と“アカデミー系”物理学者との対立は、第2次世界大戦末期の1944～1945年に表面化した。党機関の仲裁で、“アカデミー系”に有利なかたちで一度は収まるものの、戦後の“学問分野別討論”のなかで、とくに1948年8月、全連邦農業科学アカデミー総会、すなわち、“ルィセンコ学説”が勝利を収めた事件を契機に、激しいイデオロギイ的論争のかたちで再燃する。ハイキンの著書『力学』をめぐる討論もこのような過程を歩むこととなる。

ここで、あらかじめ、エス・エ・ハイキンについて手短かに紹介しておこう。エス・エ・ハイキンは1901年8月8日、ミンスクの教育者の家庭に生まれ、第1次世界大戦時に一時ペンザに疎開し、同市で初等・中等教育を終えたのち、1919年、モスクワ高等工業学校（いわゆるバウマン・スクール）を卒業し、ただちに志願して赤軍に入り、1924年まで兵役にあった。退役後、無線技士、実験助手として働きながら、モスクワ国立大学を1928年に卒業した。卒業後、レニングラード物理工学研究所で技師として働いたのち、1930年、助手としてモスクワ国立大学に戻り、准教授（Доцент）：しかし、日本と違い、一般に教授への昇進は前提されていない）を経て、教授昇進とほぼ同時に、いきなり物理学部長（1934～1937年）となった。物理学部内では、1934年から一貫して一般物理学を講じた。1946年、モスクワ国立大学での講義を継続しながら、モスクワ機械専門学校物理学教室主任（1949年まで）となった。この間、1945年からは、科学アカデミー・ペー・エヌ・レーベジェフ名称物理学研究所でも研究に従事することになった。1954年には物理学研究所を去り、中央天文

観測所に勤務するようになり、1956～1960年には科学アカデミー・無線工学研究所の上級研究員も兼任した。1968年死去。なお、ボリショイ劇場での活躍などで有名な指揮者、ボリス・エマヌイロヴィチ・ハイキン（Борис Эмануилович Хайкин: 1904-1978）は彼の弟である。

イリュージン氏の解説は、紙幅の制約を考慮し、同氏の承諾をえて、かなり圧縮している。

人名については、できるだけ初出の箇所では原綴りを附しておいた。

また、重要でありながら、日本人読者から見てなじみの薄い事象については、本文中に【】に括弧をつけて、訳者からの注を入れておいた。

本稿に加え、上記の拙著第2章、および、拙稿「ソヴィエト社会への新視点—最近の科学史研究の成果から—」（『唯物論と現代』第38号、2006年11月、40-52ページ）を併せてお読みいただければ幸いである。

市川 浩

ある本と人間の運命

— 【解説】 エス・エ・ハイキン著『力学』をめぐる討論の資料 ：その党中央宛書簡について —

アー・エス・イリュージン
(市川 浩 訳)

ソヴィエト物理学の歴史には、物理学が深刻な理念上の、また要員養成上の損害を蒙った時期がある。このことは、多くの影響力をもった物理学者が相対性理論や量子力学を多年にわたり採用しなかったこと、いく人かの傑出した、高名な物理学者が懲罰機関からの弾圧を受けたことを指摘するだけで充分であろう。

過去15年間、ロシアの出版界において党機関からの学術共同体にたいするイデオロギー的圧力に関連した、多くの問題を解明する労作が登場した^{(1)~(5)}。ソヴィエトの科学者たちが最も大規模化された論難に遭遇するのは、1940年代後半から1950年代前半にかけてである。

通常、こうした問題に言及した論者は、この時期の最も主要な事件として、「1949年における全連邦物理学会議の準備と1952年における哲学論集、いわゆる『グリーン・ブック』⁽⁶⁾の刊行」、および、エリ・イー・マンデリシュタム（Л. И. Мандельштам）の哲学的誤りを審議した物理学研

究所の学術会議【大学、学部、研究機関の最高意志決定機関。かつての日本の大学における教授会に相当する…訳者】決議のかたちで、1953年に終息した「マンデリシュタム事件」をあげている^{(7),(8)}。

こうした諸事件、とくに全連邦物理学会議の準備の時期に関わされた論戦についてはアー・ソーニンの著書⁽¹⁾でも詳しく触れられている。この本でも、その他の著作でも、アクセントはモスクワ大学の物理学者と科学アカデミーの諸研究所の物理学者との間の対立に置かれている。

しかしながら、1940年代に尖鋭化し、その後何十年か続いたこの対立の出発は、遠く1930年代に生まれている。

モスクワ国立大学物理学部、および同学部附属物理学研究所（以下、НИИФと略称）の教員のあるグループは、多くが、古典物理学の、いわゆる“レーベジェフ（П. Н. Лебедев）学派”が輩出した研究者からなり、自分たちの教師の理念を発展させることを自分たちの職業上の義務とみなし

ていた。

もうひとつのグループは“マンデリシュタム学派”に属していた(ゲー・エス・ランズベルグ—Г. А. Ландсберг—、イー・イエ・タム—И. Е. Тамм 【1958年、ノーベル物理学賞受賞…訳者】—、アー・アー・アンドローノフ—А. А. Андронов—、エム・アー・レオントヴィチ—М. А. Леонтович—、エス・エ・ハイキン、アー・アー・ヴィット—А. А. Витт—など)。この学派を代表するものたちの業績は顕著で、マンデリシュタムは戦争前にすでに科学アカデミー正会員に、ランズベルク、アンドローノフ、レオントヴィチは通信会員に選出されていた。この学派の水準の高さは、マンデリシュタムとランズベルクがラマン【Chandrasekhara Venkata Raman: 1888-1970. 1931年、ノーベル物理学賞受賞…訳者】とは独立に光の散乱効果を発見していたこと、マンデリシュタムがこの効果に完全な理論的説明をあたえていたことからあきらかである。

“大学系”物理学者と“アカデミー系”物理学者との間の激しい対立は、あの、非妥協的な学術的、イデオロギ的論争の年へと流れ込んでゆく。

これに関連して、モスクワ大学物理学部における当時の状況を明瞭に特徴付ける、次のような事実が挙げられる。1936年、ベー・エム・ゲッセン(Б.М. Гессен)の銃殺のあと、一連の大学の同僚たちがこの「人民の敵」を裁く、ミーティングや集会をおこなった。1936年12月、「研究所の状態と反革命トロツキスト=ゲッセンの敵対的活動の結果について」を審議する、НИИФの教員と院生の全体集会が開催された。集会決議には、科学研究機関での、諸学派、諸学派成員間の、日常的な闘争が煽られ、ぞっとするほどの規模となり、一方のグループの研究室(タム、ランズベルク、マンデリシュタム、ハイキン教授)が特権的な状態にあって、研究所を圧迫している一方で、ほかの研究室(アー・エス・プレドヴォディーエーティエレフ—А. С. Предводителев—、エス・テー・コノバエフスキー—С. Т. Конобеевский—、エヌ・エス・アクーロフ—Н. С. Акулов—)は必要な支援を受けることができず、通常の活動のために然るべき科

学的批判も与えられていないことが、ゲッセンの指導の重大な結果である、と述べられていた⁹⁾。

エス・エ・ハイキンは講義の資料として、大学教育課程全般にわたる力学に関する講義の草稿をまとめ、出版にむけて、国立技術・理論文献出版社に送った。このような出版の場合、当時存在した決まりにより、草稿に対して当該分野の偉大な専門家が積極的な評価を与えることが必要であった。このような評価は、偉大な物理学者、レオントヴィチ¹⁰⁾教授とエス・フリスチャノヴィチ(С. Христианович)¹¹⁾教授が与えてくれた。

評価は両者とも積極的なもので、この教科書の内容改善に向けられた、多くのコメントと提案が含まれていた。

レオントヴィチは18箇所にわたり、コメントを入れたが、基本的な評価は肯定的なものであった。

フリスチャノヴィチの展開された審査評は、15のコメントと提案を含んでいたが、その結論では「この教科書の出版はきわめて望ましい」と確認していた。

この本は、ソ連邦人民委員会議附属高等教育事業委員会によって大学の物理学部用、および師範学校の物理学・数学部用の教科書として認定され、1940年、高等教育事業委員会の公印付で出版された。印刷全紙24枚【通常1枚8ページ分…訳者】の厚さ、部数15,000冊であった。著者序文でハイキンは自らの教師、マンデリシュタムに感謝の意を表明した。

1941年6月22日にはじまった大祖国戦争は国の全生活を著しく変化させた。ファシスト・ドイツの軍隊がモスクワに近づいてくるに従って、モスクワからの工場、作業所、科学研究機関、教育機関の疎開が実施された。

モスクワ大学はスヴェルドロフスク、アシハバード両市に疎開した。物理学部は当初アシハバードへ、それからスヴェルドロフスクへ移転した。

モスクワ大学の教員で、同時に科学アカデミーで働いていた研究者は、科学アカデミーの諸研究所とともにカザン市に疎開した。

物理学部の一部はモスクワに残り、そこで、あるいはモスクワにあった防衛産業の諸企業での活

動を継続した。ハイキンはこの時期、電子工業人民委員部所属第465工場の研究室のひとつでの研究活動に専念し、そこでレーダー機構の開発をおこなった。ここで、ハイキンは全連邦共産党（ボリシェヴィキ）の党員候補となった。

1944年、国立技術出版社はエス・エ・ハイキンに教科書『力学』を再刊するように提案した。その再刊は1945年の高等教育事業委員会の計画にすでに組み込まれていた。ハイキンはこの提案に同意し、この教科書の新しい、補足、訂正が加えられた版の草稿を準備しはじめた。彼は、モスクワ大学物理学部一般物理学教室の同僚たちにその内容を審議してもらうべく、草稿を教室に提示した。このほか、印刷にまわされた草稿は、評価ってもらうために、科学アカデミー通信会員、レオントヴィチとフリスチャノヴィチに回覧された。彼らは初版の査読者であり、積極的な評価を与えてくれたものであった。第2版にたいする彼らの評価も積極的なものであった。

しかし、モスクワ大学一般物理学教室での第2版草稿に関する審議では、一連の教授、准教授たちから、この本の方法論的基礎に関して、批判的な意見が表明された。彼らは基本的な注意を「序文」の審議に振り向け、ハイキンの本における定式化をエルンスト・マッハ【Ernst Mach: 1838-1916. …訳者】の著作における定式化と結びつけ、ハイキンの一連の概念規定をマッハの本のそれに沿うものとして示しつつ、自分たちの意見を哲学的な側面に集中した。まさにこの段階で、のちにハイキンを観念論、マッハ主義として非難する基本的なテーゼが形づくられたことになる。

幸いなことに、マッハの観念論は、もうずっと以前に、ヴェー・イー・レーニンによって、ソヴィエト派マルクス主義の基本的な学校となったその著『唯物論と経験批判論』のなかで分析され、検討されていた。ハイキンは観念論批判プロパガンダのなかで非難され、マッハ主義者のレッテルが貼られることとなった。

一般物理学教室の「結論」では、その第2項で、「一連の哲学的諸問題、基本的な力学、ひいては物理学一般の命題を明らかにしようとしながら、

著者は物質、運動、空間、および時間に関するマルクス主義の命題を導入したり、弁証法的唯物論の認識論のうち、不可欠な諸要素を披瀝したりしようとはしない。これが哲学的諸問題、および、一連の、最重要な力学の諸問題の検討を中途半端なものにし、これら諸問題を主観的な観念論の精神で理解する可能性を生み出している」⁽¹²⁾と述べていた。

この批評におけるもうひとつの重要な批判的意見は、力学の発展におけるロシア人科学者の役割が不十分にしか明らかにされていないとの指摘であった。にもかかわらず、教室はハイキン教授の『力学』を第1学年の学生用教科書として出版することは可能だと見なした。

この審議に参加した一般物理学教室の同僚になかには、党員であった教授、ヴェー・アー・コルチャーギン（В. А. Корчагин）、エス・デー・グヴオズドヴェル（С. Д. Гвоздовер）、エ・エム・レイフルッデリ（Э. М. Рейхрудель）、理論物理学教室の准教授だったヤー・ペー・テルレツキー（Я. П. Терлецкий）がいた。彼らの提案でこの本の審査は学部の党組織に回された。これ以降、事態は雪だるまのように大きくなってゆく。1944年の終わり、党組織の集まりで、党書記ディヤコフ（Г. П. Дьяков）は原則的性格をもつ、許し難い方法論的誤りの廉でハイキンを非難し、哲学的側面に力点を置いて、この本を見直す必要があることを明らかにした。

党組織との関係についての決定をえるために、集会では専門委員会が設置され、コルチャーギン、グヴオズドヴェル、レイフルッデリ、アー・アー・ヴラーソフ（А. А. Власов）各教授、テルレツキー、エフ・アー・コロリョフ（Ф. А. Королёв）准教授がメンバーとなった。

委員会は数ヶ月活動を続け、決定を出し、すでに決定したものとしてハイキンに渡した。彼とはどのような事前の話し合いも委員会との協議もなかった。

この委員会の活動と並行して、学生レベルでハイキンの権威を失墜させる活動が展開されていた。党＝コムソモールの合同集会で、この本は誤って

いるどころか、有害であるとされ、これにもとづいて学生を教えることは許されないとされた。ハイキンの“マッハ主義”というレッテルは学生のあいだにも広がっていき、学生のフォークロアにも表現されるまでになった。すなわち、「エフゲニー・ストロムインキン」という戯れ歌のなかには、「…ここでハイキンは自分のマッハ主義の講義を行った…」というフレーズがあった⁽¹³⁾。大学におけるこの一連の出来事の掉尾を飾ったのは、モスクワ大学党委員会の会合であった。その決定はこの本を非マルクス主義でその本性上反動的なものとみなした。

ハイキンに伝えられた結論は、その見方が党の隊列にいることと矛盾しており、その見方を彼が変えない限り、党員候補資格を剥奪する、というものであった。

ハイキンは、彼の教科書にたいする、このような十把一絡げのこき下ろしと闘おうとした。彼の個人記録ファイルには、自分の議論と反対者たちの言明に対する反論をしたため、反対者にふたたび討論の席に戻り、自分をイデオロギー的錯誤のゆえに非難することをやめるように呼びかける紙片がいくつか残されている。しかし、これはすべて無益であった。党委員会はすでにハイキンに反対するものの側に立っていた。モスクワ大学党委員会書記であったヴェー・エフ・ノブドリョフ（В. Ф. Ноздрёв）自身物理学部の教員であった。

党委員会の決定は党員（候補）ハイキンにとっても義務的なものであったために、彼は上級の党機関に、中央委員会書記ゲー・エム・マレンコフ（Г. М. Маленков）宛の書簡をもって党委員会の彼の本に関する決定が正しいものではないことを説明した。

この書簡が党の上級機関で検討されている間、モスクワ大学党委員会は党委員会の正しい決定を認めることを拒絶した上で、ハイキンを党員候補から除名した。

ハイキンの訴願の審査は、党中央委員会のふたりの課長、エス・スヴォーロフ（С. Суворов）科学課長とゲー・アレクサンドロフ（Г. Александров）宣伝・扇動課長に委ねられた。彼

らはマレンコフ宛の審査結果を準備し、そのなかで、本質的な部分で、ハイキンの見方を擁護した。彼らは、党委員会の決定は「いままで、どこでも、一度でも哲学問題に触れたことがなく、物理学の分野で少しでも優れた専門家であると言われたことのない」ひとびとからなる委員会の結論に基礎をおくものであり、「この委員会は弁証法的唯物論の名のもとに語るという蛮勇をもって、科学的認識過程にたいするひどく単純化された形而上学的見方を擁護しつつ、現代物理学の諸理念に有害な立場に立っている。党委員会の誤りは、この本の評価に関する複雑な理論的問題を、その多くが学生と技術職員という門外漢からなる党の集会での投票に附したことにある。モスクワ大学の党組織の指導部の正しくない路線は、けっしてハイキン教授の事件だけに現れているのではない。ここ数年、モスクワ大学では、若い科学者、大学院生の間に、ソ連邦科学アカデミーのような、国の重要な学術センターと年配の科学者や外国の科学の成果に対する、高慢で、蔑視的な態度が醸成されている」と結論付けた⁽¹⁴⁾。こうした誤りとの関連で、モスクワ大学党委員会書記ノズドリョフは、共産党モスクワ市委員の職から解任された。しかし、大学党委員会は自分の路線を正しいものとみなし続けた。

モスクワ大学党委員会の決定は上級機関によって取り消され、ハイキンは党の隊列に復帰した。

『力学』第2版出版という問題はまだ決定の日を待たなければならなかった。

国立技術出版社編集部にレオントヴィチの審査評が届いた。そのなかで、彼は「ハイキンの著書『力学』は力学の物理学的諸法則とその自然と技術における力学的事象の理解に向けたその応用の記述である。その本性上、当該著作は、一般物理学の課程における詳細な（例えば、物理学・数学教員にとって）叙述に照応している。この本の初版は広く普及し、役立った。わが国の文献で、力学の物理学的側面を叙述した、十分に詳細で、良質のものは、ハイキンの本が登場するまで、事実上存在しなかった。…第2版のために、本は著者によって本質的に書き改められている。この改

善のおかげで、本はたいへん良くなった。この良質で、必要とされている本がもっとも早期に世に出て、しかるべきひとびとの間で、また、若い物理学者に属する、多くの戦後世代に普及することを望むべきである」と述べた。

違った評価もあった。とくに、准教授テルレツキーは審査評のなかで、「初級課程の学生のために準備された本に、われわれが力学の物理学的諸問題についての詳しい、論理的に首尾一貫した、完全な叙述のみならず、初歩的な方法論的命題のマルクス主義的内容をも要求するのは当然である。なぜなら、未来の科学者の世界観の基礎はまさに初級課程に、基本的な諸原理の学習に始まっているからである。残念ながら、ハイキン教授の本は基本的に最初の要求は満たしていても（物理学的内容でいっぱいである）、第2の要求（方法論）の視点から見れば、まったく満足できないものだと結論せざるをえない。いくつかの章の本質的な書き換えなしに印刷に回すことはできない」⁽¹⁵⁾と書いた。

国立技術出版社の物理学担当編集主幹であったイエ・スタロカドムスカヤ（Е. Старокадомская）はテルレツキーの審査評を精査し、彼の主観的なアプローチと先入見に留意しながら、『力学』の著者における、よく練り上げられた哲学的言語の欠如、完全に克服可能な状況のゆえに、傑出して高い資質をもつ物理学者にして、経験豊富な教師によって書かれた、物理学的素材の叙述に成功している、この教科書が非難を浴びているのは、許せないことである」と結論した。

1947年、エス・エ・ハイキンの著書『力学』は第2版が世に出た。第2版は、補足され、書き改められたものであった。出版部数は25,000部に増やされた。

しかしながら、1948年、学術出版におけるマルクス・レーニン主義的イデオロギーの純化、ソヴィエトの科学者、文化活動家の世界観における、異質な、西側からの影響に対する対抗のための、新たな闘争の波が巻き起こった。

1948年末、権力上層部で、今度は物理学の代表者にとって、あの忘れがたい全連邦農業科学アカ

デミー総会【1948年8月、“リュセンコ学説”を旧ソ連邦公認の学説として、遺伝学研究に破壊的な影響を与えた。いわゆる、狭義の“リュセンコ事件”。…訳者】に類似したものとなるであろうと予想された全連邦物理学会議の招集が決められた。会議の準備のために組織委員会が設置された。組織委員会は1948年12月30日から1949年3月16日まで、2ヶ月半にわたって活発に活動を展開した。幸いなことにこの活動は全連邦農業科学アカデミー総会のように終わらなかったが、わが国物理学者の間にさらに大きな亀裂をもたらした。

全連邦物理学会議の準備に際して、ふたつの問題、すなわち、現代物理学の哲学的諸問題と物理学教科書の問題も検討されることが想定されていた。

のちの有名なソヴィエトの物理学者で、科学アカデミー通信会員であったエス・エ・フリッシュ（С.Э. Фриш）は物理学教科書の問題に関する会議の準備について次のように回想している⁽¹⁶⁾：「セミヨン・エマヌイロヴィチ・ハイキンが1947年に力学に関する本を出した。この教科書はたいへん良いものだった。しかしながら、個々の部分ではマッハの理念にまったく無縁というわけではない。このような部分は少なく、その叙述のスタイル全体を左右するものではないし、哲学的欠点を免れていることを示すためには、印刷全紙36枚分に及ぶこの本全体からものの10フレーズも取り除けば充分であった。しかし、こんなわずかなものでも、モスクワの正統派マルクス主義の、諦めが悪い代表的人物が破壊的な批判をこの本にぶつけるには充分であった」。

ハイキンの記録ファイルには、『物理学教科書について』報告テキスト⁽¹⁷⁾と題するタイプ打ち原稿が保管されている。ほぼ間違いなく、14ページにわたるこの書類は、エス・ヴェー・カフターノフ（С. В. Кафтанов）のもとでの会議における中傷にたいする反論として準備されたものであるようだ。この文書のなかでハイキンは、彼に向けられた非難のひとつひとつに反論するだけでなく、その批判が哲学的諸問題にうまく方向付けられていない例を引きだそうとしている。彼はこう書いて

ている：「プチロフ (Путилов) 教授やその他の方から出された批判は弁証法的唯物論とはまったく無縁の機械的唯物論の立場に立つもので、正しくも、有益でもありえない。このような批判から、わたしの教科書から欠点を除き、より一層改善するために参考になりそうな指摘を分別することはたいへん困難である。このような困難は、このような批判の著者がしばしばわたしの教科書の最近の第2版ではなく、第1版を批判する(たとえば、テルレツキー教授)ことで、また15年以上も前の、240枚に及ぶ、わたしのリソグラフ版の講義録を批判する(ティミリャーゼフ—A.K.Тимирязев—教授)ことで、一層深いものになっている。…教科書に関する、満足できない状況が、ソヴィエトの物理学者、哲学者の、弁証法的唯物論の視点から現代物理学の到達を明らかにし、自分のものにするうえでも、物理学における観念論的偏向との闘争のうえでも、弁証法的唯物論に打撃を与えた観念論哲学という構築物を再建する目的で科学の成果を最大限利用しようとする試みを摘発するうえでも不十分だった活動の結果であることは疑いがない。…」

1949年、『物理科学の成果 (Успехи физических наук)』誌の3月号にモスクワ大学准教授エフ・アー・コロリョフの、「エス・エ・ハイキン教授の著書『力学』における方法論的欠陥について」と題する論文⁽¹⁸⁾が公刊された。

そのなかで、コロリョフは、一番手慣れたところから始めるように、ハイキンの本に対する“大学系”物理学者の言いがかりを継続する：「…まさに、1年次における方法論的諸問題での学生教育は、すでに一連の社会的・政治的な学問の講義を聴いたあとの上級生におけるそれに比べて、まったく不十分であると思われる。この観点から、初級課程の学生用教科書にはマルクス・レーニン主義の諸問題における首尾一貫した態度が特に要求されなければならないのである。全連邦農業科学アカデミー総会の結果は、マルクス・レーニン主義に有害なブルジョア・イデオロギーをソヴィエトの科学者の世界に浸透させようとするのがどのような有害な結果をもたらすかを、明瞭にしめ

したものである。ブルジョア・イデオロギーに屈して、この学者は外国の科学の前に膝を屈するのみならず、ブルジョア科学者の後塵を拝して、専門的科学的歪曲、ブルジョア・イデオロギーの観念論的諸命題への適応の道に立とうとしている。こうした科学者は、科学を歪曲し、社会主義建設の実践から科学を切り離し、科学を形式主義の泥沼に入れようとする。先進的なミチューリン学説にたいするメンデル＝モルガン一派の闘争はこの命題を一目瞭然に確認するものである。マルクス主義とは異質のイデオロギーの浸透は、生物諸科学に限ったことではなく、他の諸科学、特に物理学のなかでも見受けられることである。…」

このようにコロリョフの論文では、ハイキンは哲学的誤解、およびコスモポリタニズムのゆえに非難されたのである。これは、コスモポリタニズムとの闘争キャンペーンの最盛期に行われた。この時代、このような論文の根拠さえ、人間そのものについても、逮捕されたり、矯正収容所(ラーゲリ)に送られたり、簡単に銃殺されたりする口実となることもあった。本質的に、コロリョフの論文は、政治的な密告であった。

ハイキンの“観念論”については、1949年5月24日に開催された、有名な科学アカデミー・物理学研究所での学術会議⁽¹⁹⁾でも大きな注意が払われた。

物理学研究所所長エス・イー・ヴァヴィロフ (С. И. Вавилов) : 彼は当時、科学アカデミーの総裁でもあり、また、コロリョフの論文を掲載した雑誌の編集長でもあった) が開会の辞を述べた。その演説のなかで、ヴァヴィロフは当然ながら、ハイキンの著書と彼の哲学的誤解に関する問題、さらに、彼をコスモポリタニズムとロシア科学の古典に関する沈黙の廉で咎めざるをえなかった：「エス・エ・ハイキンは長期にわたって批判に対して正しくない態度で接してきました。言われていることの多くが誤りであり、偏向しているとの見方をとったからです。…ハイキンの本には、わが国科学の成果にたいする過小評価が見受けられます。…ハイキンは、批判的な意見すべてを、もう一度、深く検討し、感得しつくさなければならないし、

みずからの誤りを認識し、その詳細な分析を公表し、それら分析とともに、基本的な問題すべてについて正しい説明をしなければなりません…」。

物理学研究所の学術会議は、1) エス・エ・ハイキンがその著『力学』で犯した誤りを審議し、2) 学術会議の名前で、ハイキン同志に『力学』のなかで犯された誤りにたいする批判を展開して、可能な限り最短の期限で公表するように提案する、との決議を採択した。

もちろん、多くの物理学者が、「全国的なイデオロギー・キャンペーンというローラーに轢かれた」ものとしてのハイキンに同情し、できるだけ彼を救おうとした。学術会議の決議でも、ハイキンが研究所に勤務し続けることについては何らの具体的な制限も盛り込まれなかった。そして、研究所の党組織も彼を“人道的に”扱い、党の隊列から排除しなかった。

ハイキンの著書の検討は 1950 年になっても続いた。『物理諸科学の成果』誌の 3 月号にはエス・ゲー・ズヴォーロフとエル・ヤー・シュティトマン (Р. Я. Штейтман) 連名の論文「力学の基礎の首尾一貫した唯物論的解釈のために」が掲載された。著者たちは、ハイキンがマツハの後を追っているとして、「エス・エ・ハイキンがこの科学に関して提示したもののすべてが弁証法的唯物論の認識理論といささかとも共通する点を有していない」と決めつけた。

モスクワ大学ではハイキン“事件”の検討が続いていた。物理学部長アー・アー・ソコロフ (А. А. Соколов) の任命で、ヴェー・エヌ・ケッセニフ (В. Ф. Кессених) 教授、ペー・イー・スパスキー (Б. И. Спасский)、イエ・ゲー・シュヴィドコフスキー (Е. Г. Швидковский)、ヴェー・エフ・ノブドリョフ准教授をメンバーとする委員会が設置された。その課題はハイキンの著書が 1 年次生用の教科書として活用できるかどうかを確定することであった。

委員会の結論は単純明快なものであった：「エス・エ・ハイキンの著書『力学』は方法論的態度の点で欠陥に満ちたものであり、それゆえ、物理学に関する教科書、学習参考書としての基本的な

要求を満足させないものであり、それゆえに教科書、もしくは学習参考書として推薦することはできない」。

この結論は『物理諸科学の成果』誌に届けられ、ズヴォーロフとシュティトマンの論文とともに、そのまま 1950 年 3 月号の特集「エス・エ・ハイキンの著書『力学』の検討に寄せて」⁽²⁰⁾に収録された。

エス・エ・ハイキンの著書を批判する資料と並んで、『物理諸科学の成果』誌編集部には、エフ・アー・コロリョフの論文に反対し、ハイキンをイデオロギー的誤りという論難から守ろうとする手紙も寄せられていた。ヤロスラブリ工業専門学校理論力学上級講師、エヌ・ヴェー・イストミン (Н. В. Истомирин)、タルトゥス国立大学物理・数学博士候補、ペー・ゲー・カルド (П. Г. Кард)、トビリシ大学物理・数学部の教員、ヴェー・エス・キリー (В. С. Кирий) らの手紙である。

ハイキン自身の編集部への懺悔の手紙は、「わたしの教科書『力学』の方法論的欠陥について」と題されていた⁽²¹⁾。ハイキンの個人記録ファイルには、手書きのものも、タイプ打ちのものも含めて、この手紙のいくつかの異版が保管されている。そのすべてにたくさんの修正が施されている。懺悔の文章であるにもかかわらず、コロリョフ論文にある非難への回答で、ハイキンはみずからの路線を保ち、コロリョフが、この本を批判しようとする箇所を物理学を不正確に理解しているのみならず、哲学的側面も不正確に解釈していることをしめした。ここでは、当時よく見られた決まり文句を避けながらも、マルクス・レーニン主義の古典から引用を積極的に活用している：「…エフ・アー・コロリョフの議論における基本的な誤りを明らかにするために、わたしはヴェー・イー・レーニン (В. И. Ленин) の 2 つの指摘を引用したい。ここでは、圧縮されたかたちで、しかし、はっきりと、弁証法的唯物論の認識論の基礎が述べられている。『人間に先んじて、自然の諸現象の網の目がある。本能的な人間、未開人は自分を自然から区別されたものとは見ない。認識する人間は、区別の次の段階のカテゴリー、すなわち、世界の認

識、それを理解し、それを獲得するのに役立つ、網の目の結節点を見るのである (ヴェー・イー・レーニン『哲学ノート』国立政治出版、1947年、p.67)、『論理学は認識に関する学説である。認識には理論がある。認識は人間による自然の反映である。しかし、それは単純でも、直接的なものでもなく、まとまった反映でもなく、一連の抽象化の過程である。認識、法則などの形成、どのような認識、法則(思考、科学、「論理的理念」)が、永遠に運動し、発展する自然の、条件つきながら、近似的ながら、統一的な法則性をもとらえているのであろう。ここには、客観的に3つの主役が運動している。(1)自然、(2)人間の認識—人間の脳(自然の高度な生産物としての)、および(3)人間の認識における自然の反映形態、この形態こそ認識、法則、カテゴリーなどである。人間は自然を全体として、“その直接的—体性”を包み込む、あるいは反映する、あるいは再現することはできない。彼はただ、抽象化、認識、法則、世界の科学的な像、などなどを作り上げることで、それに永遠に近づいてゆくのである (ヴェー・イー・レーニン『哲学ノート』国立政治出版、1947年、pp.156-157)』。このレーニンの言説に照らしてみると、完全に明確に、コロリョフの誤り、唯物論的認識論の基礎そのものに対する彼の無理解が明かとなる。コロリョフは外的世界の客観的な法則性、『永遠に運動し、発展する自然の統一的な法則性』と物理学的諸法則、つまり、われわれの意識における、この統一的な法則性の、条件付の、近似的な反映とを混同している。この誤りは、彼が『世界に“確実な、確定したもの”がなければ、そのときは自然には、ニュートンの法則も含めて、法則がないことになる』と問いかけるとき、その問題設定のなかに特にはっきりと現れる。…自然の諸法則、それは、われわれの意識からは独立した、外的世界の客観的な法則性であるが、ニュートンの諸法則は、われわれの意識における自然の法則性の近似的な反映である。それゆえ、唯物論的認識論は、コロリョフが提示した質問にたいして、コロリョフが期待する答えとは違う答えを出すであろう。つまり、もし人間がいなければ、

自然の法則は存在しても、近似的に客観的な法則性を反映し、ニュートンの法則とわれわれが呼ぶ諸命題は存在しえないであろう、というふうにある」。

- (1). *A. C. Сонин*. «Физический идеализм : История одной идеологической кампании». М.:Физматлит. 1994 г.
- (2). *A. В. Андреев*. «Физики не шутят» М.:Прогресс-Традиция. 2000 г.
- (3). *Г. Е. Горелик*. "Физика университетская и академическая.", «Вопросы истории естествознания и техники.». Москва, 1991.
- (4). *С. Э. Фриш*. «Сквозь призму времени». Л.:1990.
- (5). «Физики о себе». Л.:Наука. 1990.
- (6). Под ред. *А. А. Максимова, И. В. Кузнецова, Я. П. Терлецкого, Н. Ф. Овчинникова*, «Философские вопросы современной физики» М.: Изд. АН СССР, 1952г. М.:1952.
- (7). *А. А. Семенов*. "Об итогах обсуждения философских воззрений академика Л.И.Мандельштама.", «Вопросы философии». 1953. №.3. сс..199-206.
- (8). "О философских ошибках в трудах академика Л.И. Мандельштама (Решение ученого совета ФИАН от 9.02.53) .", «Успехи Физических наук». 1953. Т.51. сс..131-136.
- (9). «Летопись Московского университета». Т.1 (1755-1952).М.:Изд-во Московского университета. 2004. стр.389.
- (10). М.А. Леонтович "Отзыв о рукописи, подготовленной для второго издания книги «Механика» профессора С.Э.Хайкина". 4 стр. /Архив Музея физики физического факультета МГУ./ Дело С.Э. Хайкина.
- (11). С.А.Христианович. "Отзыв о рукописи проф. С.Э.Хайкина «Раздел механики курса экспериментальной физики для университетов»". 5 стр. /Архив Музея

- физики физического факультета МГУ/. Дело С.Э. Хайкина.
- (12). "Заключение Кафедры общей физики физического факультета МГУ по учебнику С.Э.Хайкина «Механика (второе издание)»". 4 стр. /Архив Музея физики физического факультета МГУ./ Дело С.Э. Хайкина.
- (13). *Андреев.*, Указ. соч., стр.139.
- (14). Г. Александров, С. Суворов, Товарищу Маленкову Г. М., 8. 1. 46г. / Российский государственный архив социально-политической истории, Фонд 17, Описание 125, Дело 363./ лл.72-74.
- (15). Я.П. Терлецкий. "К предполагаемому переизданию книги проф. С.Э.Хайкина «Механика»". 1 стр. /Архив Музея физики физического факультета МГУ./ Дело С.Э. Хайкина.
- (16) *Фриш.* Указ. соч.,
- (17). С.Э.Хайкин. "Об учебниках физики" (текст выступления по докладу). 14 стр. /Архив Музея физики физического факультета МГУ./ Дело С.Э. Хайкина.
- (18). Ф.А.Королев. "О методологических ошибках в книге проф. С.Э.Хайкина «Механика»". «Успехи Физических наук». 1950. Т. XL. Вып.3. сс.388-394.
- (19). Протокол заседания Ученого совета Физического института им. П. Н. Лебедева Академии наук СССР от 24.05.1949. /Архив Российской Академии наук, Фонд 532, Описание 1-162-631.1/.
- (20). "К обсуждению книги С.Э. Хайкина «Механика» (Обзор материалов, полученный редакцией УФН)". «Успехи Физических наук». 1950. Т. XL. Вып.3. сс.476-483.
- (21). С.Э. Хайкин. "О методологических недостатках моего учебника «Механика» (письмо в редакцию)". «Успехи Физических наук». 1950. Т. XL. Вып.3. сс.483-490.

【資料】

エス・エ・ハイキンの党中央宛書簡

市川 浩 訳

全連邦共産党（ボ）中央委員会書記、ゲー・エム・マレンコフ同志
写し：高等教育事業委員会議長、エス・ヴェー・カスターノフ同志

モスクワ国立大学教授、1943年以來の党員候補、エス・エ・ハイキンより

1934年以來、わたしはモスクワ国立大学物理学部の教授として、この学部で一般物理学を講じています。もう長い間、モスクワ国立大学アー・カー・ティミリャーゼフ教授をはじめとする人々から、この授業についてわたしを観念論やマッハ主義の廉で非難する批判を受けております。この批判は、わたしの見るところ常に間違っています。しかし、わたしは自分の個人的な意見を述べた個々人の言説に抗議する権利を持っていませんでした。

しかし、今、同様の批判を個人ではなく、モスクワ国立大学の党委員会が行っております。この批判は、わたしは本質的にまったく根拠がなく、非科学的だと思っておりますので、また、最近モスクワ国立大学の党組織で採択されたという形式もまったく正しくありませんので、貴下にこの問題の検討をお願いする次第です。

批判の具体的な対象は、第一にわたしの著作『力学』です。これは、1940年に国立技術出版から出版され、高等教育事業委員会によって大学、師範学校の物理学＝数学部の教科書として認定された、物理学の一般教程の最初のもので、1944年秋、国立技術出版社はわたしにこの教科書を再版するように提案いたしました。高等教育事業委員会の1945年次教科書計画にはすでに含まれておりました。これに関連して、わたしが主任を務めるモスクワ国立大学物理学部一般物理学教室では、第2版で取り除かれるべき欠点を探す目的で、わたしの教科書の検討が行われました。この検討

には、一連の共産党員が参加しました。一般物理学教室の同僚、カルチャーギン、グヴォズドヴェル、レイフルゥデリ教授、隣接する教室のテルレツキー准教授が参加しました。テルレツキーはわたしの本の何カ所かを方法論的な視点から批判しました。「序文」やその他のいくつかの部分との関連では、この批判は注意に値するものでした。実際、「序文」における定式化のいくつかはまったく成功しておりませんし、方法論的な視点から見て重要な、いくつかの問題には十分な注意が払われておりませんでした。しかしながら、わたしがこの批判に同意したのは、叙述の個々の欠陥にたいする批判として、であり、本の基本的な内容についてではありませんでした。本の基本的な内容については、わたしは物理学的にも、方法論的視点からも正しいと思っておりましたし、そう思いつづけております。わたしの本に関する審議のあと、一般物理学教室によって採択された決定は、まさにそのような雰囲気の中で行われました。これに応える修正をわたしは第2版のために施し、現在それは印刷準備中であります。

教室における私の本の審議のあと、その批判は党組織に場所を移して続けられました。1944年の終わり、物理学部の党組織の書記、ゲー・ペー・ディヤコフは、学部の党員集会で、わたしの本が大きな方法論的な誤りを有しているという、全般的な性格をもった演説をしました。この集会では、わたしも発言し、このような事実無根の発言に反対を表明し、すべての批判的な意見はより具体的

になされるべきだと述べました。この党員集会では、わたしの教科書を方法論の視点から検討する委員会が設置されました。この委員会にはカルチャーギン、グヴォズドヴェル、レイフルウデリ、ヴラーソフ教授、テルレツキー、ミクリューコフ（Микрюков）准教授が加わりました。この委員会はわたしとは一度も協議せず、何ヶ月かあとにすでに準備した結論を通知するだけでした。この結論にたいするわたしの意見も聴取されませんでした。物理学部党組織書記のディヤコフはこの時期、党とコムソモールの秘密集会でわたしの本がひどい方法論的な誤りをもっていること、それは有害で、それにそって学生を教育してはならないことなどを主張しました。最終的に、この直後、わたしはモスクワ大学党委員会の会議に招集され、この問題に関する党委員会決定の準備された草稿を見せられました。そこでは、委員会の結論が確認され、わたしの本がその本質においてマルクス主義とは違う、反動的なものと認められる、とありました。このようにして、党委員会では会議以前にすでに決定的な意見がまとめられていたのです。この会議におけるわたしの反論は何の変化も与えることができませんでした。わたしがまったく賛同できない決定が採択されました。

この決定は、委員会の結論と一連の人物の党委員会における発言が根拠となっております。委員会の結論は、わたしはまったく正しくないものと思っております。自分の非難を根拠付け、わたしがマッハ主義者であることをしめすために、委員会はまったく不道徳な批判方法を採用しました。わたしの本、主にその「序文」から個々のフレーズを切り取って、その内容を歪曲し、「序文」にはない考えをわたしに帰し、その内容を考えもせず、マッハの本から引用した個々のフレーズと並べてみることをさせたのであります。しかし、マッハとわたしの本から切り取った個々のフレーズを並べてみても、何もしめすことはできません。このように、たとえば、審査評ではわたしの本の「序文」から「…自然には、物質の点というものも、絶対の固体というものも、点としての電荷も、われわれが物理学的諸問題を理論的に検討するとき

に利用する、その他の諸相の数多性も存在しない。これらはすべて、問題の理論的な検討を単純化する（そして、一般的に成り立ちうるものとする）ために現実の物理系に代替される抽象である」というフレーズを引用しています。この考え方は、マッハの著作『認識と誤解』から引用した次のフレーズと並べられています：「完全な気体、完全な液体、完全な固体というものは存在しない。物理学者には、恣意的に事実を単純化することで、彼のフィクションが事実とただ近似的にのみ照応していることは明らかであり、取り除くことができない偏差があることも明らかなのである」。わたしとマッハのフレーズの外見上の類似は、わたしのマッハ主義的な観点の証拠とみなされております。しかしながら、フレーズが似ているこの部分の、このような表現は観念論哲学に固有のものではまったくありません。唯物論的な物理学者は、みな、わたしが理論において利用した諸命題、それが部分的に現実の対象物の性質を反映した抽象であることを理解しております。唯物論と観念論の違いはこうした抽象と現実の対象物との関係にたいする見方によって見分けられます。観念論者にとっては、これらの抽象は条件的で、恣意的な象徴ですが、唯物論者にとっては、近似的ながら、いささかも恣意的ではない客観的現実の反映です。それゆえ、まさに唯物論的認識にとって、どの程度、どれぐらい正確にわれわれの抽象化は現実の対象の特性を反映しなければならないか、という問題設定そのものが特徴的なものです。この問題には、基本的に、わたしの『力学』の「序文」の最初の段落が宛てられています。このように、わたしの「序文」における問題設定そのものが唯物論的なものであり、マッハ主義とはいささかも共通するところはありません。批判者が上記のふたつのフレーズを並べて、わたしのマッハ主義的な観点の証拠とするのは、ただ彼らの不誠実さと無知によるものであると、わたしは説明できます。

このように“証拠”をあげる方法に気をよくして、委員会は、わたしの本の最初のフレーズさえも利用しようとしています：「あらゆる物理現象を研究しようとする、われわれは何よりも、主要

なもの、つまり、研究の対象となる現象の性格が本質的に依存しているものを区別し、その現象のなかで目に見える役割を果たしていない、副次的な条件を排除しなければならない」。わたしの本からこのフレーズを引用して、委員会の結論は「直接観念論を見て取るのは難しいとしても、ハイキン教授の本の最初のフレーズからして、マッハの著作142ページの15行目から借用したものであることは特徴的である」と述べています。この例で特に顕著なのは、委員会が採用した批判の方法そのものに不道徳性が見受けられる点です。わたしがマッハ主義者であるなどという証拠付けられないことを証拠付けようとして、委員会はわたしがマッハからその考えを借用しているとして、わたしを非難していますが、わたしの考えは、科学研究の方法を少しでも知っている者なら、誰でもが知っている、周知の公理です。

党委員会の会議の席で、党委員や何人かのその他のメンバーが述べたことに関して言えることは、それらのなかには、ときに、物理学の観点からはまったく受け入れがたい命題が含まれていたことです。たとえば、コロリョフ准教授は、力学における力（弾性と重力）はただ座標にのみ左右されるのであって、速度には左右されない、というわたしの本にある確認点に反対して、「このようにして、基本的な物質の特性、その属性としての運動をハイキンは力の発生の説明から排除してしまっている」と述べています。つまり、コロリョフは、重力や弾性力は物体の速度に依存しているかどうか、という問題は一般的な哲学的判断から導き出せると考えているようです。哲学の問題と具体的な物理問題との、こうした許し難い混同、その弁証法的唯物論という科学的な哲学とはまったく異質な通俗化はこのような“哲学的見解”と、一連の人々（ティミリャーゼフ、コロリョフ、レイフルッデリら）が党委員会の席上行った発言に含まれていた批判の水準を特徴付けるものです。

それゆえ、わたしの意見では、わたしに対する批判者のいくつかの個々の言及については考慮することができたとしても、全体として批判を、党委員会の席上なされたようなやりかたでは、まっ

たく考慮することはできません。それはまったく根拠がないからであり、反科学的であるからです。わたしが耳にした批判にたいするわたしの態度については、全体として党委員会の会議で訴えました。これに関して、党委員会書記のノズドリョフ同志とその次席であるセルゲーエフ（Сергеев）同志から、わたしの見方は党の隊列にいることと照応しない、もしわたしが見方を変えないのであれば、全連邦共産党（ボ）党員候補からわたしを除名する問題が起こってくるであろうとの指摘を受けました。

党員ムラヴェイスキー（Мчравейский）教授はわたしが見方を変えなければ、わたしについて、「追悼の祈りを仕度する」必要が出てくるだろうと言って、まったく同じことを、もっと鋭い言い方で繰り返しました。こうした発言は、すべて、当然ながら、学術的な討論ではなく、わたしの見方を捨てさせようとする脅迫のように思えます。

これに関して、わたしは党委員会書記ノズドリョフがわたしに対してどのような態度をとったかについて、特別に述べる必要だと考えています。わたしは、電子工業人民委員部第465工場で党員候補となりました。その年（1943年）、わたしはある新しい製品の開発を指導することに時間の大半を費やしておりました。その直後、モスクワ大学党委員会書記のノズドリョフは、わたしに、モスクワ大学の党組織への転籍についての問題を提案しました。わたしは、そのとき、工場での仕事が減って、大学での仕事に完全に復帰できた段階でそうしよう、と言いました。1945年はじめ、（わたしの願いで）第465工場の実験室学術指導者としての職務を解任され、学術コンサルタントに配置換えされたとき、転籍いたしました。わたしの党員候補期間は1944年末に終わり、第465工場の党組織は正規の党員への昇任手続きをとることを提案いたしました。大学がわたしの基本的な職場となることを考慮して、大学でそうすることがより正しいと考えました。このことについて、モスクワ大学党委員会書記ノズドリョフに述べたところ、彼は、大学には以前からわたしを知っている者もいるので、そうすることが一層目的

に叶っている、と述べて、わたしの申し立てに賛成してくれました。モスクワ大学の党組織はわたしを自分たちの集団にとって望ましい人物であると考え、わたしの入党に賛成してくれているように思えました。しかしながら、党委員会の会議でノズドリョフは、わたしが大学では入党するのは難しいので、そのための抜け穴として第465工場の党組織を利用したと述べました。残念ながら、わたしはノズドリョフのこの発言を一言一句にいたるまで再現することはできません。というのは、それは不正確に速記され、それから速記録の修正が行われて、単純なものに変えられているからです（速記録には「抜け穴」という語は残されていましたが、フレーズ全体としてはノズドリョフの発言の内容は伝わっていません）。ノズドリョフは、わたしが不正直に入党したとして非難し、わたしの誠意に疑問を表明しました。こうした非難はまったく効果をもたないし、公正でもないことは言うまでもありませんが、わたしがモスクワ大学の党組織への転籍の前にノズドリョフから聞いていたこととはまったく違っていました（数日後開かれた党委員会の会合で、わたしはモスクワ大学の党組織の一員に数えられるようになりました）。わたしのなかでは、ノズドリョフがわたしのモスクワ大学の党組織に転籍することを促したのは、ただわたしがモスクワ大学党委員会の決定に逆らえない状態に置くためであって、わたしが党委員会にとって党組織の望ましい一員であるからではなかったのだ、という確信が強くなりました。わたしにたいする態度という点での党委員会書記のこうした不誠実な振る舞いは、わたしの眼から見て受け入れ難いことをわたしに押しつけるために党委員会が利用した、許し難い方法の特徴付けるものであります。現代科学の側に立つ、唯物論的物理学者として、わたしは現代物理学の諸理念が、単一の、最終的哲学であり、物理学にとっても受容可能な弁証法的唯物論の基礎といささかたりとも矛盾するものではないことを深く確信しております。言うまでもなく、現代物理学の見方に関する不正確な解釈がいく人かの物理学者を観念論へと導く可能性をもっており、現に導いております。

しかしながら、こうした観念論的歪曲との闘争は、新しい物理学的理念について沈黙することによって行われうるものではありません。にもかかわらず、わたしの批判者たちが物理学教程のはじめにおいて相対性理論の基本的命題の叙述に反対するとき、あるいは、わたしに何百年か昔と同じように力学を叙述せよと要求するとき、彼らはまさにこの正しくない路線を採っているのであります。たとえば、党委員会の会合における発言で、ティミリャーゼフ教授は「なぜ、なんの困難のないのに、『ニュートンが素早い知恵で』述べたように、力学の教程では述べられないのか？」と述べました。ティミリャーゼフ教授は、慣性力に関する命題の中に観念論の危険性を見て取って、わたしにニュートンも使った座標系だけを使うように、つまり、加速をもつ座標系で運動を観察しないように要求しました。しかしながら、どんな物理学者も技術者も、加速度をもって運動する座標系のなかで課題を解決する能力を身につけなければなりません。それをしなければ、多くの場合、具体的な物理学的課題は甚だ複雑なものになるからです。観念論的歪曲との闘争のこのようなプリミティヴなやり方が、現代科学の側に立つ物理学者にとってまったく受け入れがたいものであることは言うまでもありません。

わたしは物理学における観念論的歪曲との闘争の重要性を完全に理解しております。しかしながら、わたしの批判者が前提しているような、プリミティヴな闘争方法を採ることは、わたし個人にとって受け入れがたいばかりでなく、わたしが請け負っている事業の利害という観点からも許し難いものであるがゆえに、できかねるものです。わたしは、ソ連邦でもっとも大きな一般物理学教室のひとつの指導者としての、またソヴィエトの高等教育機関用の教科書の著者としてのわたしの課題が、物理学を弁証法的唯物論の精神で、しかもそれとともに現代科学の水準で、形而上学的、あるいは、粗野な機械論的唯物論の立場に立っている人物の反科学的、反動的な観点を利するよう現代物理学の諸理念をいささかも無視することなく叙述することにあると考えております。残

念ながら、こうした人物たちは、物理学部とモスクワ大学の党委員会に影響力をもっております。本質的には現代科学に反対する、彼らの発言は党委員会の側から反対に遭うどころか、たとえば、党委員会委員のムラヴェイスキー教授のように、そのメンバーから支持さえ受けているのであります。彼は「ここには恥ずべきマッハ主義は存在する余地はない。しかし、現代科学の水準、“世界科学”をつくらうとする現代物理学の水準に立とうとするような物理学の流行はありうる」と述べました。現代科学の立場に立つ科学者に有罪を宣告しているような、この発言は、本質的に、現代科学に敵意をもって接し、みずからの反動的な見方を弁証法的唯物論の哲学に見せかける物理学者の集団の影響下に党委員会が置かれているという、正しくない観点を特徴付けています。モスクワ大学の党委員会にはひとりも権威をもった物理学者はいません。そのため、党委員会は、わたしの見るところでは、物理学の分野でも、哲学の分野でも、権威をもっているようには思えない人物の意見に頼り、物理学の方法論に関する原理的な諸問題についての党委員会での審議は一般に有益なものとはなりえないのです。これによって、党委員会がわたしの本に関する問題について正しくない決定を下したことの説明がつくと思います。

にもかかわらず、この決定は、モスクワ大学の党組織の一員としてのわたしに教科書や講義のなかでわたしが展開した見方を変え、それをわたしの批判者が述べた精神で再建するように義務づけました。しかしながら、以上述べたことから、わたしにはそうできないことは明白です。すなわち、党委員会の決定が効力を有するものであれば、わ

たしはこの決定が義務となる共産党員として、自分の講義と教科書第2版の出版を断念しなければなりません。それゆえ、わたしは貴下に党委員会の決定の取り消しをお願いする次第です。

わたしは、わたしが、個人としてのわたしに関する上述の判定についてのみならず、モスクワ大学の党組織一員として、党委員会が採った扱いにたいして抗議する義務を負っているものと思います。わたしは、こうした扱いが、党の科学の哲学問題にたいする見方にふさわしいものではないこと、ソ連邦でもっとも大きな高等教育機関の党組織の名声を失わせるものであることを、深く確信しております。本質的には、現代科学の精神で物理学を叙述することに反対しつつ、観念論との闘争という外見のもとに介入することで、モスクワ大学の党委員会は、まるで現代科学の見方が弁証法的唯物論の見方と照応しないかのような、偽りの印象を生み出し、そのことで弁証法的唯物論の精神でソヴィエトの物理学者を養成する事業に大きな害を及ぼしました。

わたしは、審議が目的にかなったものとなるのであれば、どのようなものでも権威をもった科学集団、あるいは、学識ある科学者によって特別に設置された委員会において、科学的、方法論的観点から、わたしの本が審議されることに、まったく反対ではありません。

モスクワ国立大学物理学部一般物理学教室主任
物理学 = 数学博士
教授

エス・ハイキン（署名）

【資料】

エス・エ・ハイキンの党中央宛書簡（原文）

Секретарю ЦК ВКП(б) товарищу Г.М. Маленкову
копия Председателю ВКВШ товарищу С.В. Кафтанову

от профессора МГУ С.Э. Хайкина, кандидата ВКП(б) с 1943 года.

С 1934 года я состою профессором физического факультета МГУ и читаю курс общей физики на этом факультете. Уже давно некоторые лица, в первую очередь профессор МГУ А.К. Тимирязев, выступали с критикой этого курса, упрекая меня в идеализме и махизме. Критику эту я всегда считал неправильной, но не имел оснований заявлять протест против выступлений отдельных лиц, высказывающих свое личное мнение.

Сейчас, однако, с подобной критикой выступают уже не отдельные лица, а партийный комитет МГУ. Поскольку эту критику по существу я считаю в целом необоснованной и антинаучной, а форму, которую она приняла в последнее время в партийной организации МГУ совершенно неправильной, я обращаюсь к Вам по этому вопросу.

Конкретным объектом критики является в первую очередь моя книга «Механика» – первая часть общего курса физики, изданная Гостехиздатом в 1940 году и утвержденная ВКВШ в качестве учебника для физико-математических факультетов университетов и педагогических институтов. Осенью 1944 года Гостехиздат предложил мне переиздать мой учебник, включенный в план учебников ВКВШ на 1945 год. В связи с этим на кафедре общей физики физического факультета МГУ, которой я

заведую, было проведено обсуждение моего учебника с целью выявления тех дефектов, которые должны быть устранены во втором издании. В этом обсуждении принимал участие ряд членов партии – работников кафедры общей физики – профессора Карчагин, Гвоздовер, Рейхрудель и смежных кафедр – доцент Терлецкий, которые критиковали с методологической точки зрения некоторые места моей книги. В отношении «Введения» и нескольких других отдельных мест эта критика заслуживала известного внимания. Действительно, некоторые формулировки «Введения» не вполне удачны и на некоторые важные с методологической точки зрения вопросы в «Введении» не обращено достаточного внимания. Однако, я соглашался с этой критикой, только как с критикой отдельных недостатков изложения, но отнюдь не основного содержания книги, которое я считал и продолжаю считать по существу правильным как с физической, так и с методологической точки зрения. В таком именно духе было сформулировано и решение, принятое кафедрой общей физики после обсуждения моей книги. Соответствующие исправления были сделаны мною для второго издания книги, которое сейчас подготовлено к печати.

После обсуждения моей книги на кафедре, критика ее была перенесена в партийную организацию. В конце 1944 года секретарь парторганизации физического факультета МГУ Г.П. Дьяков выступил на партийном собрании факультета с заявлением общего характера о том, что моя книга содержит крупные методологические ошибки. Выступая на этом собрании я возражал против таких голословных заявлений и настаивал на том, чтобы все критические замечания были сформулированы более конкретно. На партийном собрании была избрана комиссия, которой было поручено просмотреть мой учебник с методологической точки зрения. В комиссию вошли профессора Карчагин, Гвоздовер, Рейхрудель, Власов, доцент Терлецкий, доцент Королев и доцент Микрюков. Комиссия эта со мной ни разу не разговаривала: через несколько месяцев мне было передано для ознакомления готовое заключение комиссии. Моего мнения по поводу этого заключения у меня даже не спросили. Примерно в это же время секретарь партийной организации физического факультета Дьяков на закрытом партийно-комсомольском собрании заявил о том, что моя книга содержит грубые методологические ошибки, что она является вредной и по ней нельзя учить студентов и т.д. Наконец, вскоре после этого я был вызван на заседание партийного комитета МГУ, где был поставлен вопрос о моем учебнике. Перед началом заседания мне был предъявлен вопрос о моем учебнике. Перед началом заседания мне был предъявлен готовый проект решения парткома по этому вопросу: в этом проекте утверждались выводы комиссии и моя книга признавалась чуждой марксизму и реакционной по своей сущности. Таким образом у парткома к заседанию уже было выработано определенное мнение. Мои возражения на заседании ничего не изменили и решение это, с которым я

совершенно несогласен, было принято.

Это решение основано на заключении комиссии и на выступлениях ряда лиц на заседании парткома. Выводы комиссии я считаю совершенно неправильными. Чтобы обосновать свои обвинения и доказать, что я махист, комиссия применила совершенно порочный метод критики. Выхватывая из моей книги, главным образом из «Введения», отдельные фразы, комиссия либо просто искажала их смысл, приписывая мне мысли, которых в «Введении» нет, либо сопоставляла их с отдельными фразами из книг Маха, не вникая в их содержание. Но сопоставление отдельных фраз, выхваченных из книг Маха и моей, конечно, само по себе еще ничего не доказывает. Так, например, в рецензии приводится фраза из «Введения» к моей книге: «... в природе не существует ни материальных точек, ни абсолютно твердых тел, ни точечных электрических зарядов, ни множества других образов, которыми мы пользуемся при теоретическом рассмотрении физических проблем. Все это абстракции, которыми мы замещаем реальные физические системы для того чтобы упростить(и вообще сделать возможным) теоретическое рассмотрение проблемы». Эта мысль сопоставляется со следующей цитатой из книги Маха «Познание и заблуждение»: «Совершенного газа, совершенной жидкости, совершенного упругого тела не существует: физику известно, что его фикции соответствуют фактам только приблизительно, произвольно упрощая их: ему известны отклонения, которые не могут быть устранены». Внешнее сходство этих фраз моих и Маха считается доказательством моих махистских взглядов. Между тем в той части, в какой они сходны, эти высказывания отнюдь не являются характерными для идеалистической философии. Всякий физик-материалист

понимает, что представления, которыми мы пользуемся в теории, это абстракции, лишь частично отражающие свойства реальных объектов. Различие между материализмом и идеализмом определяется точкой зрения на соотношение между этими абстракциями и реальным объектом. Для идеалиста эти абстракции являются условными и произвольными символами, для материалиста – приближенным, но отнюдь не произвольным отражением объективной реальности. Поэтому именно для материалистического понимания характерна сама постановка вопроса о том, в какой мере и насколько точно наши абстракции должны отражать свойства реальных объектов. Этому вопросу и посвящен в основном первый параграф «Введения» к моей «Механике». Таким образом сама постановка вопроса в моем «Введении» является материалистической и не имеет ничего общего с махизмом. Только недобросовестностью или невежеством моих критиков я могу объяснить то, что сопоставляя две приведенные выше фразы они усматривают в этом доказательство моих махистских взглядов.

Увлечшись таким методом «доказательства» комиссия пытается для этого использовать даже первую фразу из моей книги: «Приступая к изучению всякого физического явления, мы должны прежде всего выделить то главное, от чего существенно зависит характер изучаемого явления и отбросить второстепенные обстоятельства, которые в этих явлениях не играют заметной роли». По поводу этой фразы из моей книги в выводах комиссии сказано: «Характерно, что даже первая фраза книги проф. Хайкина, в которой трудно прямо усмотреть идеализм, позаимствована у Маха со стр. 142, абзац 15». На этом примере особенно отчетливо видна порочность самого метода критики, примененного комиссией. Стараясь во что бы то

ни стало доказать, что я махист, комиссия упрекает меня в заимствовании у Маха мысли, которая является абсолютно общепризнанной и очевидной для всякого, кто хоть немного знаком с методом научного исследования.

Что касается высказываний на заседании парткома членов комиссии и некоторых других лиц, то в них содержались подчас совершенно неприемлемые с точки зрения физики положения. Так, например, доцент Королев, возражая против содержащегося в моей книге утверждения, что силы в механике (упругие и гравитационные) зависят только от координат и не зависят от скоростей, заявил: «Таким образом, основное свойство материи, ее атрибут – движение – Хайкин предлагает изгнать при объяснении происхождения сил». Следовательно, Королев полагает, что вопрос о том, зависят ли силы тяготения или упругие силы от скоростей тел, можно решать исходя из общих философских соображений. Это недопустимое смещение вопросов философии и конкретных вопросов физики, эта вульгаризация, совершенно чуждая научной философии диалектического материализма, характеризует те «философские взгляды» и уровень той критики, с которой выступал на заседании парткома ряд лиц (Тимирязев, Королев, Рейхрудель и др.).

Поэтому, хотя некоторые отдельные замечания моих критиков и можно было бы обсуждать, но всю критику в целом, в том виде, какой она приняла на заседании парткома, по моему мнению обсуждать вообще невозможно, ибо она является либо совершенно необоснованной, либо вообще антинаучной. Об этом отношении ко всей выслушанной мною критике в целом я и заявил на заседании парткома. В связи с этим мне было указано секретарем парткома т. Ноздревым и его заместителем т. Сергеевым, что мои взгляды

несовместимы с пребыванием в рядах партии и что если я не изменю их, то возникнет вопрос о моем исключении из числа кандидатов ВКП(б).

То же самое, но в еще более резкой форме повторил член парткома проф. Муравейский, заявив, что если я не изменю своих взглядов, то по мне придется «справлять панихиду». Все эти высказывания выглядят, конечно, не как научная дискуссия, а как угрозы, которыми пытаются заставить меня отказаться от моих взглядов.

В связи с этим я считаю нужным специально остановиться на том, как вел себя по отношению ко мне секретарь парткома Ноздрев. Я вступил в кандидаты ВКП(б) на заводе № 465 НКЭП, где я в то время (1943 год) проводил большую часть времени, руководя разработкой одного нового объекта. Уже вскоре после этого секретарь парткома МГУ Ноздрев поставил передо мной вопрос о переходе в партийную организацию МГУ. Я сказал тогда, что собираюсь это сделать когда объем моей работы на заводе сократится и я смогу снова полностью вернуться на работу в МГУ. Это произошло в начале 1945 года, когда на заводе № 465 я был освобожден (по моей просьбе) от обязанностей научного руководителя лаборатории и переведен на должность научного консультанта. Поэтому хотя мой кандидатский стаж истек в конце 1944 года и парторг завода № 465 предложил мне оформить переход в члены партии на заводе, я считал более правильным сделать это в Университете, поскольку Университет снова становится основным местом моей работы. Об этом я сказал секретарю парткома МГУ Ноздреву, который одобрил мое намерение, заявив, что в Университете это мне сделать целесообразнее, поскольку меня здесь давно знают. Все это выглядело так, что партийная организация МГУ считает меня желательным членом своего коллектива и одобряет мое

вступление в партию. Между тем на заседании парткома Ноздрев заявил, что я воспользовался партийной организацией завода № 465 как лазейкой для того, чтобы вступить в партию, т.к. знал, что в Университете мне это сделать будет трудно. К сожалению я не могу буквально воспроизвести этого заявления Ноздрева, т.к. оно было не точно застенографировано, а затем при исправлении стенограммы просто изменено (в стенограмме сохранилось слово «лазейка», но вся фраза в целом совершенно не передает смысла заявления Ноздрева). Ноздрев меня упрекнул в том, что я поступил нечестно и выразил сомнение в моей искренности. Не говоря о том, что эти обвинения совершенно незаслуженны и несправедливы, они никак не согласуются со всем тем, что я слышал от Ноздрева до моего перехода в партийную организацию МГУ. (Заседание парткома состоялось через несколько дней после того, как я стал на партийный учет в МГУ). У меня сложилось твердое убеждение, что Ноздрев побуждал меня скорее перейти в партийную организацию МГУ лишь затем, чтобы поставить меня в положение, при котором решение парткома МГУ будет для меня обязательным, а отнюдь не потому, что я являюсь желательным для парткома членом парторганизации. Это неискреннее поведение секретаря парткома по отношению ко мне также характеризует те недопустимые методы, которыми пользуется партком для того чтобы навязать мне неприемлемые для меня взгляды. Как физик-материалист, стоящий на позициях современной науки, я глубоко убежден, что правильное понимание современных физических идей никак не может привести к противоречию с основами диалектического материализма, единственной последовательной философией, приемлемой для физика. Конечно, неправильное толкование современных

физических взглядов может привести и приводит некоторых физиков к идеализму. Однако борьба с этими идеалистическими извращениями никак не может вестись путем замалчивания новых физических идей. Между тем именно на этот неправильный путь становятся мои критики, когда возражают против изложения основных представлений теории относительности в начале курса физики, или требуют, чтобы я излагал механику так, как она излагалась сотни лет тому назад. Так, например, в своем выступлении на заседании парткома проф. Тимирязев заявил: «А почему в курсе механики не изложить дело так, как это сказано у “быстрого разумом Ньютона”, где никаких трудностей нет?» Проф. Тимирязев, усматривая опасность идеализма в представлении о силах инерции, требует, чтобы я пользовался только той системой координат, которой пользовался Ньютон, т.е. отказался бы от рассмотрения движений в системах координат, обладающих ускорением. Между тем всякий физик и инженер должен уметь решать задачи в движущихся ускоренно системах координат, ибо отказ от этого во многих случаях чрезвычайно усложняет решение конкретных физических задач. Излишне говорить о том, что такой примитивный путь борьбы с опасностью идеалистических извращений совершенно неприемлем для физика, стоящего на позициях современной науки.

Я понимаю всю важность борьбы с идеалистическими извращениями в физике, но встать на такой примитивный путь борьбы, который предлагают мои критики, не могу не только потому, что это неприемлемо для меня лично, но и потому, что это недопустимо с точки зрения интересов дела, которое мне поручено. Я полагаю, что моя задача, как руководителя одной из крупнейших кафедр

общей физики Советского Союза и как автора учебников для советских ВУЗ’ов состоит в том, чтобы излагать физику в духе диалектического материализма, но вместе с тем на уровне современной науки, но никак не в том, чтобы игнорировать идеи современной физики в угоду антинаучным и реакционным взглядам лиц, стоящих на позициях метафизического или даже грубого механистического материализма. К сожалению, эти лица пользуются влиянием на физическом факультете и в парткоме МГУ. Высказывания этих лиц, направленные по существу против современной науки, не только не встретили возражений со стороны парткома, но даже были поддержаны членами парткома, например, проф. Муравейским, который в своем выступлении заявил: «Может быть здесь даже не стыдливый махизм, а может быть такая мода в физике, во что бы то ни стало на уровне современной науки, на уровне современной физики строить «мировую науку». Это высказывание, в котором содержится осуждение ученым, стоящим на позициях современной науки, характеризует ту неправильную точку зрения, на которую стал партком под влиянием группы физиков, по существу враждебно относящихся к современной науке и пытающихся эти свои реакционные взгляды выдавать за философию диалектического материализма. Поскольку в составе парткома МГУ нет ни одного авторитетного ученого-физика и поэтому партком вынужден опираться на мнение лиц, которые по моему убеждению не являются авторитетными ни в области физики, ни в области философии, обсуждение на парткоме принципиальных вопросов методологии физики вообще не могло быть плодотворным. Этим же объясняется, что партком принял неправильное решение по вопросу о моей книге.

Между тем это решение обязывает меня как члена партийной организации МГУ изменить взгляды, развиваемые мною в учебнике и в лекциях и перестроить их в духе высказываний моих критиков. Однако из всего сказанного ясно, что я не могу этого сделать. Значит, если бы решение парткома осталось в силе, я как коммунист, для которого это решение обязательно, должен был бы отказаться от чтения своих курсов и выпуска второго издания учебника. Поэтому я прошу Вас отменить решение парткома.

Я считаю себя обязанным протестовать против позиции, занятой парткомом не только по указанным соображениям, касающимся меня лично, но и как член партийной организации МГУ. Я глубоко убежден, что эта позиция не соответствует взглядам партии на вопросы философии науки, и компрометирует партийную организацию крупнейшего в Советском Союзе высшего учебного заведения. Выступая под видом борьбы с идеализмом по

существо против изложения физики в духе современной науки, партком МГУ создает совершенно ложное впечатление, будто современные научные взгляды несовместимы с философией диалектического материализма и этим приносит огромный вред делу воспитания советских физиков в духе диалектического материализма.

Само собой разумеется, что я ничего не могу иметь против обсуждения моей книги с научной и методологической точки зрения в любом авторитетном научном коллективе или в специально созданной комиссии компетентных ученых, если такое обсуждение будет признано целесообразным.

Зав. кафедрой общей физики
физического факультета МГУ
доктор физ.-мат. наук
профессор

(С.Хайкин)